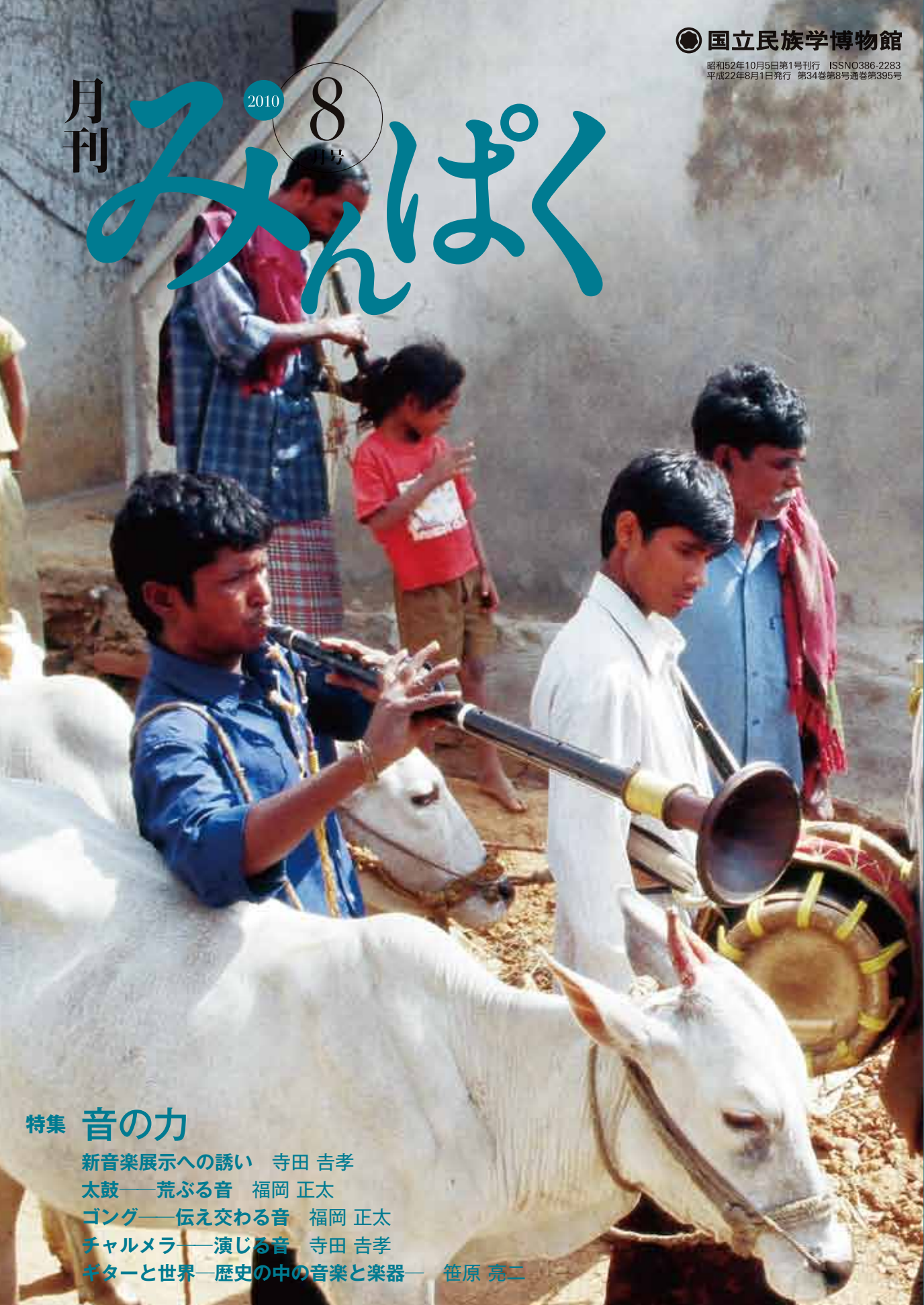
国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成22年8月1日発行　第34巻第8号通巻第395号

月刊みんぱく

2010 8月号



特集　音の力

新音楽展示への誘い　寺田 吉孝
太鼓――荒ぶる音　福岡 正太
ゴング――伝え交わる音　福岡 正太
チャルメラ――演じる音　寺田 吉孝
ギターと世界―歴史の中の音楽と楽器―　笹原 亮二

エッセイ 千字文

少年時代

釜本 邦茂（かまもと くにしげ）

プロフィール
元日本代表サッカー選手でフォワードをつとめた。1967年よりヤンマー・ディーゼル（のちのセレッソ大阪）に所属。1968年開催のメキシコオリンピックでは、6試合出場中7得点を挙げて日本代表を銅メダルに導き、自身も得点王に輝くなど、前人未到の成績を多く残した。現役引退後は、Jリーグ発足時にガンバ大阪の初代監督を務めるなど、日本サッカー界の強化に尽力する。現在、日本サッカー協会副会長。

勉強が苦手だった少年時代、私が近所の友人たちと没頭していたもの、それは野球でした。スポーツには自信があった私は、将来プロ野球選手になることを夢見ていました。

そんな野球少年だった私はいま、サッカーの世界で生きています。転機となったのは、小学校の恩師のこんな一言でした。「野球では甲子園にしか行けないけど、サッカーがうまくなれば、世界中の国へ行けるし、オリンピックにだって出れるぞ」。中学に入学した私は、恩師の言葉に感化され、迷うことなくサッカー部へと入部したのです。

今思えば、安易なきっかけでした。しかし、いい指導者と仲間に恵まれた私は、四〇を超える国々へ行き、また、二度のオリンピックに出場することが出来たのです。

そんな経験の中で、今の私にとって一番大きな財産は、サッカーを通じて世界中の文化に触れ、また、数々の素晴らしい出会いがあったことでしょう。たとえば、一八歳のときに出会った西ドイツ出身のクラマー氏。彼からは「本当のサッカー」や「ストライカーとしての役割」を徹底的に叩き込まれました。私がヤンマーに在籍していた時には、ネルソン吉村という素晴らしいブラジル人のパートナーに巡り会い、数多くのタイトルを獲得しました。ほかにも、ペレやベッケンバウアー、クライフ、オベラーツといった世界的な選手との出会いも私にとっては大きな刺激でした。

私を成長させてくれたのは何も選手だけではありません。敵、味方に関係なく、いいプレーに対しては温かい声援を送ってくれる、サッカーを愛する世界中の人々の存在が私を勇気づけてくれたのです。その中でも、メキシコ五輪で地元メキシコと戦った三位決定戦での残り一〇分のことは忘れられません。メキシコサポーターが我々に割れんばかりの声援を送ってくれたのです。その声や光景は、今でもはっきりと私の耳に残り、脳裏に焼き付いています

きっかけは小学校の恩師の一言でした。しかし、その一言が野球少年の人生を大きく変えるのみならず、世界中の人々との素晴らしい出会いにまで導いてくれたのです。その出会いを演出してくれた恩師に私は強く感謝しています。

月刊 みんぱく 8月号目次

1 エッセイ　千字文
少年時代　釜本 邦茂

特集　音の力
2 新音楽展示への誘い　寺田 吉孝
5 太鼓――荒ぶる音　福岡 正太
6 ゴング――伝え交わる音　福岡 正太
7 チャルメラ――演じる音　寺田 吉孝
9 ギターと世界―歴史の中の音楽と楽器―　笹原 亮二

10 研究フォーラム
グローバルな助け合いについて考える
鈴木 紀
12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
正倉院の博物館学
五月女 賢司
15 みんぱく 私の逸品
ギター
押尾 コータロー
16 散策と思索の径
吹田の三名水を訪ねる
久保 正敏
18 多文化をささえる人びと
難民支援から日本社会の成熟をめざして
認定NPO法人 難民支援協会
金 美善
20 歳時世相篇
焼肉の日（日本）
語呂合わせの記念日
朝倉 敏夫
22 フィールドで考える
門の向こうに広がる世界
今中 崇文
24 次号予告・編集後記

音の力 特集

わたしたち人間は、
音や音楽によって意志や感情をつたえ、
居場所や環境を知り、
訪れたことのない場所や過ぎ去ったときに思いを馳せ、
心を奮い立たせたり慰めたりしてきました。

また、神仏や精霊など
見ることのできない存在と交わってきました。
今年三月にオープンした
新しい音楽展示では、
このような音や音楽のもつ多様な力について、
世界各地の例を通して考えます。

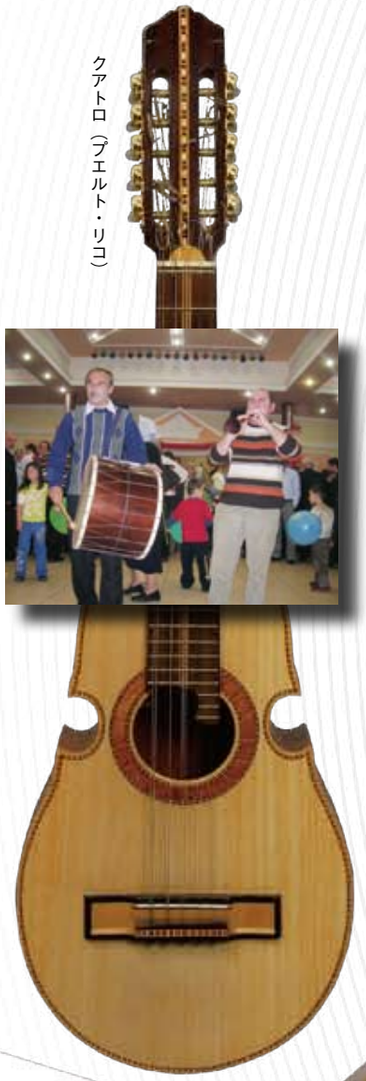
フラメンコの歌とギター（スペイン）

結婚式における太鼓演奏と踊り（マリ）

環状ゴング（カンボジア）

結婚式でのズルナ演奏（トルコ）

ドゥルサイナ（スペイン）


クアトロ（プエルト・リコ）

ギターラ（ポルトガル）

うちわ太鼓（日本）

ダフ（イラン）

コン（カンボジア）

新音楽展示への誘い

寺田 吉孝（てらだ よしたか） 民博 民族文化研究部

音や音楽が溢（あふ）れている現在の日本では、その存在は空気のようなものかもしれない。空気がなければ窒息してしまうように、音や音楽は人間の営みをもっとも基本的な部分で支えているのだが、その本源的な役割や重要性について考えることは少ない。今年三月にオープンした新音楽展示は、「人間にとって音・音楽とは何だろうか」という問いに思いを巡らせる場所を作りたいという意図から生まれた。

音が降り注ぐ

展示場には入口がふたつある。どちらから入っても中央のシンボル・ゾーンに向かう途中で、唐突に音が聞こえてくるスポットがある。天井に備えつけた高指向性スピーカー六台から、音が展示場に降り注いでくる仕掛けになっていて、これが展示への導入部である。そこで脈絡なしに聞こえてくる、虫の声、死者を弔う声、判別不可能な楽器音などが、聴く者に「これは音楽?」と問いかける。

四つの楽器群

続く展示の主要部分は、「太鼓」「ゴング」「チャルメラ」「ギター」という四つの楽器群によって構成されている。これは、楽器を大きく四種類に分類するホルンボステル＝ザックス法に基づいているが、モノとしての楽器の展示を目指しているのではない。選ばれた四つの楽器群は、それぞれ人間が音・音楽ときりむすぶ関係のいくつかの側面に光を当てる。各セクションの内容については次頁以降のエッセイにゆずるが、全体として、音や音楽がもつさまざまな力を感じることができる展示を目指した。

誰が、どこで、どのように

今回のリニューアルの一番大きな特徴は、モノとしての楽器の展示から、文化としての音・音楽の展示に重点をシフトさせた点である。誰が、どこで、どのようにして音楽を演奏するのか、またその結果出現す

る音響がどのような文化的意味をもつのかがわかるように、モノ（楽器）、写真、映像音響の三つの媒体をひとつのセットとして展示することにした。特に力を入れたのはビデオ映像である。展示場の壁面や床には三〇台以上のモニターが取りつけられており、しかも、ここで見ることができる映像の大半が、新展示のためにあらたに収集されたもので、他には存在しない貴重な映像が数多く含まれている。また、展示場の映像コンテンツについてより詳しく知ることができるように関連番組を合わせて制作した。これらは、ビデオテークのブースでゆっくりと時間をかけて見ることができる。

展示の終結部「音楽の今、これから」では、特定の個人がどのように音楽とかかわっているかに焦点をあて、取材映像のなかから音楽に深くかかわる人たちをビデオで紹介している。彼らの熱い語りと演奏に接することが、「自分にとっての音楽」を考えるきっかけになってくれれば嬉しい。

太鼓―荒ぶる音

福岡（ふくおか） 正太（しょうた） 民博 文化資源研究センター

太鼓は、世界でもっとも広く使われている楽器のひとつである。多くの音楽において、生き生きとしたリズムを生み出す原動力となっている。しかし、太鼓の使用は、狭い意味での「音楽」には限定されない。雨を呼び、精霊と交わり、神に祈るためにも、太鼓は用いられてきた。人間の体をゆさぶり、遠くまで響き渡る太鼓の音は、見えない存在にまで届くと考えられたのだろう。人類は、音にどのような思いを乗せてきたのか。それを考えるひとつの例として、太鼓のセクションを設けた。

祭りの太鼓

祭りに欠かせない大きな太鼓。これが、日本社会に育った多くの人が思い浮かべる太鼓だろう。太鼓展示において、大阪府立上方演芸資料館からお借りした大変立派な太鼓は、そうした太鼓のひとつである。大阪の河内地方の盆踊り歌である河内音頭の音頭取り、鉄砲（てっぽう）光三郎（みつさぶろう）さんが使っていたもので、長年打ち込まれてきた風格をそなえている。腹の底に響くような太い音を出し、「魂」を震わす力を体現しているかのような太鼓である。祖先の霊を迎え、祀（まつ）り、送るにふさわしい。

うちわ太鼓

しかし、世界のさまざまな太鼓に目を向けてみると、必ずしもこうしたイメージが太鼓のすべてではないこともわかる。たとえば、タンバリンのような枠太鼓やうちわ太鼓のように、手にもって演奏できる太鼓もある。祭りの太鼓のような太い音は出せないが、手軽にもち運べるため、移動あるいは行進しながら演奏したり、手にもって踊りながら打つことができる。東アジアから中央・北アジア、アメリカにかけて、枠太鼓を打ちながらトランスに入るシャーマンの伝統がみられる。枠太鼓を打ち、精霊への呼びかけのことばと動作にリズムを与え、やがて忘我の状態となり精霊と交わる。また、日本では、日蓮宗などにおいて、題目を唱える際にうちわ太鼓を打つことがある。日蓮聖人の命日を記念する御会式（おえしき）には、万燈（まんどう）を掲げうちわ太鼓を打ちながら行列し寺に参拝する万燈練供養（まんどうねりくよう）をおこなう。祈りのことばにリズムと力を与える役割を太鼓は果たしている。

現代社会における太鼓

太鼓の力は、伝統的な儀礼などに使われるだけでなく、現代社会における自己表現の手段としても使われている。一九七〇年代以降、和太鼓が大きなブームとなるなかで、自分たちの存在を積極的に打ち出す手段として太鼓を用いるグループが生まれてきた。バチを大きく振り上げ和太鼓を打ち込む動作は、パフォーマンスとしても人を惹きつけるが、同時に打ち手の存在を強く打ち出すことにもつながる。そして、生み出された音は、打ち手自身の体を震わせ広がっていく。押さえつけられてきた思いや主張を解放し、力強く表現するために太鼓は強力な表現の手段となるのである。

太鼓集団「怒」の演奏

ゴング——伝え交わる音

福岡正太（ふくおかしょうた）　民博・文化資源研究センター

東南アジアにおけるゴング

ゴングは、東南アジアに広くみられる楽器のひとつである。民俗的な音楽から宮廷音楽まで、幅広い音楽に用いられる一方で、行事の開始の合図として打たれたり、何かを知らせるために用いられたりする。鉄や青銅を素材とするゴングの製作には、専用の設備や技術が必要とされ、素材の金属を手に入れるためにもそれなりの対価がかかる。身近な素材である木や竹と異なり長持ちし、代々受け継がれる貴重な品でもある。ゴングやゴングを含むアンサンブルを所有することは、しばしば、その人の財力や権力をあらわした。また、ゴングは精霊と交わる手段としても用いられてきた。

カンボジア少数民族のゴング

カンボジア北部ラッタナキリに住む少数民族の生活において、ゴングは重要な意味をもっている。たとえば、クルンとよばれる人びとは、病気治療などのために、スイギュウやウシなどの動物を犠牲にして精霊にささげる儀礼をおこなう。そのとき、五つのゴングのアンサンブルを欠くことができない。五人がそれぞれこぶのようなでっぱりのあるゴングをもって打ちながら、柱につながれた動物の周りをまわり、そしてその動物を犠牲にする。

このアンサンブルは、結婚式にも演奏するし、人が亡くなったときにも演奏する。ちなみに人が亡くなったときに演奏する曲は、ほかの機会に演奏することはできない。ゴングを聴いて、死者がいると思ってやってきた精霊の怒りを買ってしまうからである。

表面の平らなゴングで旋律を奏する（ラッタナキリ カンボジア）

クルンの人びとは、表面にでっぱりのない平らなゴングももっている。一二ゴングのアンサンブルは、五個のこぶつきゴングと七個の平らゴングが使われる。こちらのアンサンブルは、娯楽的要素のより強いもので、五つのこぶつきゴングのリズムにのり、七つの平らゴングでメロディを演奏する。

ゴングチャイム

ラッタナキリの人びとのゴングは、基本的に奏者一人がひとつのゴングをもち演奏するものだったが、東南アジアには一人の奏者が複数のゴングを演奏するものもある。研究者がゴングチャイムと総称する楽器がそれである。東南アジア大陸部では環状に並べたものが多く、宮廷アンサンブルなどに用いられる。カンボジアのピンピアットもそのひとつで、そこではコン・ヴォンとよばれる環状ゴングが用いられている。一方、東南アジア大陸部では環状のゴングチャイムはみられず、一列ないし二列に直線的に並べたものがほとんどである。フィリピンのクリンタンなどがその例である。

宮廷のガムラン

インドネシアのジャワ島やバリ島などにみられるガムランは、もっとも多くのゴングを用いるアンサンブルといってよいだろう。ジャワ島の大型ガムランの場合、つり下げ型のゴングのセット、平置き型のゴングのセット、二列のゴングチャイムなどが用いられる。ガムランは、もともと宮廷で発達したアンサンブルで、さまざまな儀礼や公式行事に際して演奏されてきた。特に王宮に備えられたガムランは、それぞれ特別な力を秘めていると信じられており、ゴングは、単なる楽器ではなく、王の力の源泉ともなっているのである。

チャルメラ——演じる音

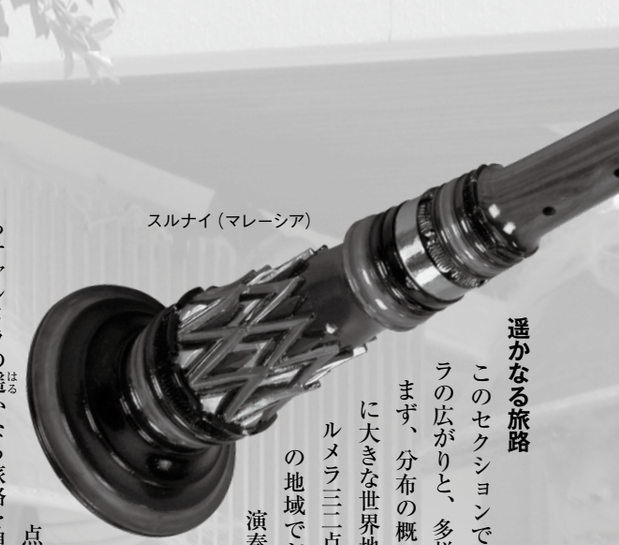
寺田吉孝（てらだよしたか）　民博・民族文化研究部

たらら〜らら〜

夜更けに流れてくる、チャルメラの音。「たらら〜らら〜」で始まる有名な調べは、食欲と哀愁を同時に感じさせるようだ。このようにチャルメラがラーメン屋台の音になる前は、飴売（あめ）りの音だった。辻の行商が唐人風の衣装でチャルメラ（唐人笛）を吹きながら飴を売った。またチャルメラは、沖縄や九州の民俗芸能の伴奏音楽としても演奏されてきた。この場合も沖縄県富盛（ともり）の唐人行列や熊本県八代市の獅子舞（ししまい）などに見られるように、異国（中国）のイメージがからみついており、その音や形が異人・異文化をあらわす指標であったことを示している。

このように、日本のチャルメラは極めて限定的な使われ方をしてきたが、国外に出ると事情はまったく異なる。ユーラシアの広大な地域で、また北・西アフリカ、中南米の一部でも、チャルメラと同種の楽器が頻繁に演奏されてきた。しかも、宗教儀礼、人生儀礼、呪術儀礼から軍楽、スポーツ、武道、演劇の伴奏にいたるまで、驚くほど多様な場で演奏されているのだ。また、その音は雰囲気つくりの単なる装飾ではなく、演奏される場の不可欠な構成要素であると考えられていることが多い。

イベリア半島のチャルメラ（チリミア）は16世紀にスペイン人宣教師たちによってアメリカ大陸へ伝えられた（アンティグア グアテマラ）



スルナイ（マレーシア）

遥かなる旅路

このセクションでは、そのようなチャルメラの広がりと、多様な演奏の場を紹介する。

まず、分布の概要を示すために、展示場に大きな世界地図を作り、その上にチャルメラ三二点を配置した。おおよその地域でどのようなチャルメラが演奏されているかを一望することができる。この楽器は西アジアで生まれ世界各地に広がったと考えられている。伝播の時期やルートには不明な点が多いが、地図を見ながらチャルメラの遥かなる旅路を想像してみてほしい。

チャルメラの力

チャルメラは太鼓との組み合わせで演奏されることが多く、音が大きいため屋外での演奏に適している。このため、人びとが集い交わる場で盛んに演奏される。「演奏の場」コーナーでは、チャルメラ演奏の多様なコンテクストを、おもにビデオ映像で紹介している。チャルメラの音は人生の節目において特に重要であり、インドやトルコのように、それなしには結婚式が成立しないという諺を伝える地域さえある。

また、チャルメラの音は人を鼓舞したり勇気づけたりする力があり、軍楽やスポーツ・武術の伴奏として頻繁に用いられる。日本でも有名なトルコの軍楽（メフテル）の中心的な楽器がチャルメラ（ズルナ）であり、その音は勇猛なトルコ軍、ひいてはオスマン帝国の威信をあらわした。このような音の力は、スポーツや武術でも活用され、タイ、カンボジアのキック・ボクシングやトルコ、バルカン諸国のレスリングでは、チャルメラの音で選手が集中力を高める。スペイン東部には、人間が順に肩の上に乗って塔を作る組み体操のような競技ムイシェランガがあり、そこでもチャルメラ（ドゥルサイナ）の演奏が不可欠だ。このほか、シャーマンの儀礼や影絵人形芝居などのように、チャルメラの音が人を異界へ導いたり神や精霊と交わる媒体となったりする。いずれの場合も、チャルメラの音は聴く者に強い感覚や情念を呼びおこし、それぞれの場で不可欠な役割を演じている。

背景：唐人行列で演奏されるチャルメラ（沖縄 日本）

別府の流しが弾いていたギター（日本）

ギターと世界――歴史の中の音楽と楽器――

笹原亮二（民博 民族文化研究部）

ギターはわたしたちにもっともなじみのある楽器のひとつである。もっとも一般的な六弦のギターは、一八世紀にスペインあたりで生まれたとされる。それ以降、ギターは世界中に広まりさまざまな音楽を奏でてきた。しかし、そのありようは世界中で決して一様ではない。

小ぶりで複弦のギター

ポルトガルのギターとしては、民衆歌謡のファドで用いられる、ギターラとよばれる紡錘形の複弦のギターがよく知られているが、それだけではない。それ程広くない国土にもかかわらず各地方には独特のギターが見られ、演奏されている。それらはいずれも小ぶりで複弦で、六弦のギターの成立につながるそれ以前の古いギターの姿を伝えている。

小ぶりで複弦のギターは中南米でも多く見られる。それらは、ヨーロッパでの六弦ギターの成立以前に、ヨーロッパの人びとによる植民地化や、キリスト教の布教や移民を契機に伝わったギターが元となっている。プエルト・リコのクアトロやティプレは、木を刳りぬいて胴を作るので、小振りなわりに意外と重いが、構造的に簡単で、薄い板を貼り合わせる普通の六弦ギターとは異なり、器用な人は自ら作ることができる。中南米各地でよく見られる地元の人びとの手作りのギターも、六弦ギター成立以前にヨーロッパから伝来した、小振りで構造が簡単なギターが元となっている。

ブルースからロックへ

ポピュラー音楽とギターとのかかわりというとまず思い浮かぶアメリカ合衆国でも、ギターと歴史は無関係ではない。今やアコースティック・ギターの代名詞ともいえるC．F．マーティンは、家具職人を祖にもつドイツからの移民が興した会社である。ブルースの成立は、一九世紀末、大量生産や通信販売で安価なギターが出回り、アフリカ系の人びとが入手できるようになったことと深くかかわっている。

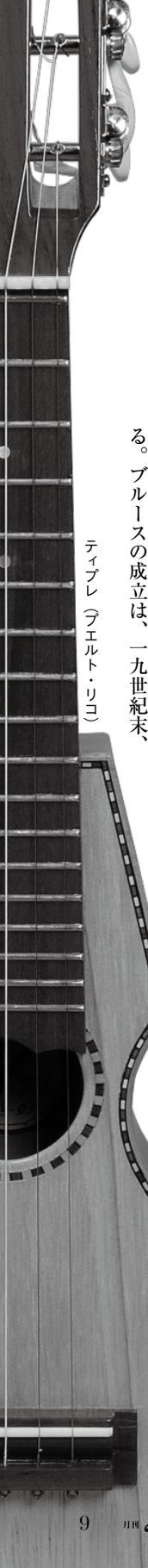
一九五〇～六〇年代、ヨーロッパ各地からの移民に伝わる古い歌に注目したフォーク・リバイバルからギターを弾いて歌うプロテスト・ソングが生まれ、公民権運動やベトナム反戦運動と深くかかわるに至った。

また、一九六〇年代、東西冷戦やベトナム戦争の泥沼化のなか、愛、平和、脱文明を標榜して登場したカウンター・カルチャーでは、電気的増幅で音を歪ませた大音量のギターが鳴り響くロックが、既成の社会体制への反抗となっていった。

演歌・歌謡曲

こうした世界各地のギターの歴史的な展開と、日本のギターのありようも深くかかわっている。戦前のジャズや、戦後のウエスタンやロカビリーやフォークやロックは、それぞれの時代における海外からのギターとその音楽の伝来なしには考えられない。

しかし、その一方で、日本が単にそれらを単に受容するに止まらなかったことは、演歌や歌謡曲、浪曲や漫才などの芸能とギターの関係を思い起こせば十分である。そして、こうしたことは、おそらく日本に限ったことではない。世界各地のギターの多様な姿は、外部とかかわり、影響を受けつつも、それぞれの地域なりの受容や展開の結果であり、更にいえば、それは世界の各地域の人びとが経てきたそれぞれの歴史のあらわれと考えることもできるだろう。



ティプレ（プエルト・リコ）

研究フォーラム

グローバルな助け合いについて考える

鈴木 紀（すずき もとい）
民博 先端人類科学研究部

おぼえたての猿踊りを精一杯舞うマヤの人びと。
さまざまな集団とのかかわりが必要な社会において、その姿が意味するものは何だろうか。
文化再生への自発的な挑戦ともみなせる彼らの背後をみつめ直すことにより、人類学のあらたなアプローチについて考える。

猿踊りとマヤ民族

二〇一〇年五月二三日、中央アメリカのベリーズ国南部トレド地方にあるラバントゥン遺跡で、近隣のサンホセ村に住む有志のグループが猿踊りを舞った。彼らはモパン語を話すマヤ民族の人びとだ。下は小学生から上は村の長老まで一五人の踊り手の思いはひとつ。過去二〇年以上演じられることがなかった猿踊りの復興だ。

モパンの人びとの大半は、もともと隣国グアテマラに住んでいた。しかし一九世紀半ばころから故国で土地を奪われ、難民となってベリーズに逃げてきた。現在はベリーズ国民となり、政府から与えられた居留地で農業を営んでいるが、生活を安定させるためには市場経済への参入が不可欠だ。その結果、彼らの暮らしは居留地内部で完結しなくなり、トレド地方のさまざま民族（スペイン語を話すラテン系の人びと、カリブ海地域からやってきたガリフナの人びと、アメリカやヨーロッパからの移民、そしてはるばるアジアからやってきたインド系や中国系の人びとなど）とかかわりながら、自己のアイデンティティを主張する必要が生じている。

習いたての猿踊りゆえ、ぎこちない面があったことは否めない。しかし精一杯踊る彼らの姿からは、マヤとして現代を生きていこうとする意志が読み取れた。こうした現象を、マヤ民族の自発的な文化の再生とみなすことも可能だが、じつはその背後にたくさんの支援活動があることも事実である。わたしが関心をもっているのは、どのような支援がこうした結果を生んだのかという問いであり、そうした支援が現代社会に対してもっている意味の考察だ。

マヤ遺跡ラバントゥンを舞台に演じられた「猿踊り」

支援の人類学

二〇〇九年一〇月から三年半の計画で「支援の人類学――グローバルな互恵性の構築に向けて」という研究が始まった。これは民博の機関研究「包摂と自律の人間学」領域のプロジェクトである。研究代表のわたしを含め先端人類科学研究部に所属する五人の教員、および機関研究員二名、館外の研究者九名、そして外国の研究者四名が参加している。

包摂とは社会的包摂ともいわれる概念であり、通常は、福祉国家のセイフティネットから排除された人びとを再び国民社会に迎え入れようとする活動を意味する。自律とは、包摂された人びとが自分らしく生きるために自ら意思決定ができる状態をさす。こうした状況はどうしたら実現できるのだろうか。そのためには排除された人びとと包摂する人びと双方に、何が求められているのだろうか。「包摂と自律の人間学」の目的はこれらの問題の解明にある。

「支援の人類学」プロジェクトが採用するアプローチは、包摂と自律を促すための具体的な支援活動に焦点をあてることである。研究対象とする活動は多岐にわたる。それは包摂の対象となる人びとが多様だからである。例えば、移民や難民、およびその結果として無国籍となった人びと、開発途上国で社会経済的に周辺的な地位に置かれている人びと、そして先進国で少子高齢化に悩む人びとなどを想定し、こうした者たちへの支援活動の成果と課題を考えることで、「包摂と自律」の条件を浮き彫りにしたいと狙（ねら）っている。

カカオのフェアトレード

マヤ民族の話しに戻ろう。猿踊りが演じられたのはトレド・カカオ・フェスティバルという催しの一環であった。古代マヤ文明の時代からベリーズ南部がカカオの産地であったことにちなんだ地域興しのイベントだ。地元の観光協会や、環境保護団体、ベリーズ国文化歴史省などの共催だが、中心となっていたのはトレド・カカオ栽培者組合（通称TCGA）という組織だ。約七〇〇人のTCGA組合員から集めたカカオ豆は、マヤ・ゴールドというフェアトレード・チョコレートに加工されてイギリスやアメリカで売られている。有機栽培カカオの濃厚な風味と、カカオ生産者の発展に貢献するというフェアトレードのメッセージが功を奏し、とくにイギリスでは人気のチョコレートになっている。マヤ・ゴールドを購入する消費者の支援がなければ、TCGAの組織的発展はなく、それなしにはカカオフェスティバルも猿踊りも実現できなかったであろう。

支援活動としてのフェアトレードの面白さは、貿易という商業活動に生産者支援という慈善的活動を合体させている点である。市場交換と贈与をいっしょにした交換形態といってもよい。一般にカカオ貿易は、国際価格が低迷しているときには、生産者を貧困に追い込んでいく。これに対しフェアトレードは、国際価格の動向にかかわらず、生産者の生活が成り立つ買い取り価格を保証し、発展のための報奨金を設置するなど、「公正な貿易」を標榜（ひょうぼう）する制度である。

収穫されたばかりのフェアトレード・カカオ

フェアトレードによる支援が、ベリーズ南部のマヤ民族の包摂と自律に貢献している可能性は高いが、そう結論づけるにはまだまだ研究が必要だ。しかし、もしこの見通しが正しいとすれば、わたしたちは大きな希望を見出すことになる。包摂と自律を実現するためには、国家の社会政策をめぐる侃々諤々（かんかんがくがく）の議論も必要であろうが、フェアトレード・チョコレートを購入するというシンプルな支援行為の積み重ねも有効だということだ。本研究を通じて世界の人びとが容易に、しかし確実に助け合える方法を探究していきたい。

民博機関研究
包摂と自律の人間学
「支援の人類学――グローバルな互恵性の構築に向けて」　2009年10月～2013年3月
代表者　鈴木 紀
＊関連シンポジウム＊
機関研究国際シンポジウム
「希望社会への道――スウェーデンと日本におけるウェルビーイングの思想と市民社会」
実施日　2010年11月7日（日）
場所　国立民族学博物館 講堂

みんぱく
Information

特別展

「彫刻家　エル・アナツイのアフリカ――アートと文化をめぐる旅」

ガーナ生まれでナイジェリア在住のエル・アナツイは、現代アフリカを代表する彫刻家です。木の彫刻や廃品を使った織物の作品で知られています。本展では、アナツイの作品とその文化的な背景をなぞっていきます。

「ピーク」（錫、銅線、2010年、作家蔵）

会期　9月16日（木）～12月7日（火）
会場　特別展示館

企画展

「歴史と文化を救う――阪神淡路大震災からはじまった被災文化財の支援」

阪神淡路大震災から15年を迎えた今、これまで展開されてきた被災文化財の救出活動を検証し、今後の展望を考える機会にしたいと考えます。

会期　9月28日（火）まで
会場　本館展示場内

「伝統の布の〝いま〟――東南アジアのふだん着にみる実情――」

東南アジアの国々で収集した「四角い布」や「筒型の布」などのふだん着を展示し、グローバル化が進展するなかで変貌をとげつつある伝統の布の実情を紹介します。

会期　9月14日（火）まで
会場　本館展示場内
※研究者によるギャラリートークをおこないます。
実施日　①8月3日（火）②8月24日（火）
時間　14時30分～15時30分
※また、本企画展では、試着コーナーを併設しています。試着可能な日時はホームページでご確認ください。

音の力――夏のみんぱくフォーラム2010

◆研究公演
「インドネシア・バタックのギターと歌」
実施日　8月13日（金）
時間　13時30分～15時
会場　1階エントランスホール
※参加無料、申込不要

◆研究公演
「揺さぶる力――大阪浪速の太鼓打ち」
実施日　8月28日（土）
時間　座談会　13時30分～14時（開場13時）
　　太鼓演奏　14時15分～16時
会場　講堂
定員　450名
※参加無料、要申込
（申し込み方法はホームページでご確認下さい）
申し込み締切り　8月12日（木）必着

◆展示場クイズ
「みんぱくQ　音楽編」
期間　8月1日（日）～8月31日（火）
場所　音楽展示場
※要観覧料、申込不要
以上、夏のみんぱくフォーラム関連イベントのお問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話　06・6878・8210
（平日9時～17時）

国際シンポジウム
「ディアスポラにみる文化の融合――民族衣装・ファッション、カルチャーウェア」
日時　①8月27日（金）10時30分～17時45分
　　②8月28日（土）10時30分～17時
会場　第4セミナー室
※参加無料、申込不要
※関連イベントとして解説つきのショー「カルチャーウェア――文化と心を身にまとう」を8月29日（日）講堂にて開催。
お問い合わせ
中牧弘允研究室
電話　06・6878・8269

みんぱく秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンスを開催

秋の遠足・校外学習にむけて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。

実施日　8月27日（金）、8月30日（月）、8月31日（火）
時間　14時～17時
会場　第5セミナー室ほか
参加申し込み方法
みんぱくホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入のうえ、FAXにてお送りください。
お問い合わせ
広報企画室広報係
電話　06・6878・8560
（平日9時～17時）

夏休みこどもワークショップ
「ロウと藍染めでモヨウをつくろう」
今回は、東南アジアなどで使われている溶かしたロウをつかって布に模様をつける方法を紹介します。
実施日　8月22日（日）
時間　①11時～12時　②13時～14時　③15時30分～16時30分
会場　第3セミナー室
対象　小学1年生以上（小学生未満は保護者同伴で参加可）
参加費　500円
参加申し込み方法
当日会場前にて申し込み受付を致します（各回定員12名、先着順）詳しくはホームページをご覧ください。
お問い合わせ
情報企画課展示グループ
電話　06・6878・8532
（平日9時～17時）

※詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■池谷和信　編
『日本列島の野生生物と人』

世界思想社　定価：2,520円
シカ、イノシシ、トキ、アシカやアザラシ、そして山野の植物……様々な生物と人はどのような関係を築いてきたのか。遺伝学、生態学、地理学、考古学、民俗学、文化人類学など学際的アプローチによって、両者の関係の過去・現在・未来を展望する。

■M.B.МОНГУШ　著
『ОДИН НАРОД: ТРИ СУДЬБЫ』
国立民族学博物館調査報告NO. 91

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料
※本館展示をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第387回　8月21日（土）
【新音楽展示関連】
主張する太鼓
講師　寺田吉孝（民族文化研究部教授）

1960年代以降、社会的正義を要求する運動の一部として太鼓を演奏する例が増えてきました。日本（大阪）の被差別部落、アジア系アメリカ人、インドのダリット（不可触民）などを例として、このような運動における太鼓演奏の意味・位置づけについて報告します。

第388回　9月18日（土）
【特別展関連】
博物館と美術館の間
――美術から見える現代アフリカの居場所
講師　川口幸也（文化資源研究センター准教授）

アフリカの現代美術は、博物館に展示されたり美術館に展示されたりしています。このような現象は、欧米や日本の現代美術には見られません。アフリカの現代美術が置かれているこうした状況をてがかりにして、世界における今日のアフリカの問題を考えてみます。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　国立民族学博物館　第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）
第387回　9月5日（日）
※今回は日曜日の開催ですのでご注意ください
19世紀アメリカのユートピア思想
講師　鈴木七美（先端人類科学研究部教授）
時間●14時～15時30分（13時30分開場）
「若草物語」は作者のオルコット自身の少女時代をもとにした半自伝的な小説です。彼女の家族はエマソンやソローといった超越主義者とも交流があり、当時としてもユニークな家庭、教育環境で育ちました。その背景にある19世紀アメリカで展開したユートピア思想、その理想的な生活についてお話しします。

第388回　10月2日（土）
特別展「彫刻家 エル・アナツイのアフリカ」関連
美術に映るアフリカの位置
――エル・アナツイのアフリカ
講師　川口幸也（文化資源研究センター准教授）
時間●14時～15時（13時30分開場）
美術品はふつう美術館に展示されます。ところが、アフリカ美術の場合は必ずしもそうではありません。現代アフリカを代表する彫刻家として名高い、ナイジェリアのエル・アナツイの作品世界をたどりながら、アフリカが置かれている位置を考えます。
※講演会終了後、特別展見学会があります。

お知らせ
9月4日（土）に国立民族学博物館内で開催されるイベント学会のため第387回「友の会」講演会は5日（日）の開催となります。「友の会」会員は4日のイベント学会の講演会およびシンポジウムに無料で参加することができます。詳しくは03・5215・1680（イベント学会）までお問い合わせください。

◆特別講演　13時～
70年万博の遺伝子――イベントの進歩と調和
講師　橋爪紳也（イベント学会副会長）
◆シンポジウム　14時～
EXPOの文化遺伝子ミームは今？
出演者　吉田憲司、嘉門達夫、ヤノベケンジほか
会場　国立民族学博物館　講堂

国立民族学博物館ミュージアムショップ

電話　06-6876-3112
FAX　06-6876-0875
水曜日定休

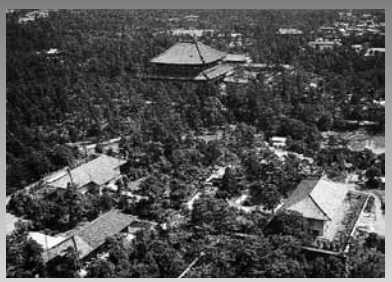
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/
e-mail　shop@senri-f.or.jp

現在開催中の企画展「伝統の布の〝いま〟――東南アジアのふだん着にみる実情――」（9月14日まで）にあわせて、ミュージアム・ショップでも東南アジアを中心に伝統的な布を集めたフェアを開催中です。
東南アジア諸国に現在も日常で使われる衣服としての布だけでなく、それらを用いたインテリアテキスタイルやショール、ブックカバー、巾着といった小物類も並び、「思わず足を止めてしまう」、楽しい品揃えとなりました。また会期中は東南アジア以外の地域の布にも力を入れてご用意しております。
なお、ミュージアム・ショップは本館1階の無料ゾーンにございますのでどなたもご自由にお入り頂けます。ご来店をお待ちいたしております。

左から　バティックサロン（インドネシア）6,825円
　　シルクショール（ラオス）40,950円
　　イカットテーブルクロス（インドネシア）2,310円
　　スンバ島絞り布（インドネシア）18,900円

正倉院の博物館学

五月女賢司（さおとめ けんじ） 民博 機関研究員



創建時は東大寺の倉だった正倉院（左下）
『正倉院』（財団法人菊葉文化協会）より転載

意外な事実

博物館という施設やことばができるずっとむかし、奈良時代から博物館的な施設は存在していた。西暦七五〇年代に創建された奈良の正倉院である。

博物館学の世界では正倉院は、基本的に博物館機能の一部（保存機能）をもつ施設であり、宝物の公開・活用はなかったとされる。本当にそうだったのか気になり調べてみた。その結果、意外な事実がわかってきた。

正倉院宝物は、薬物以外は盧舎那仏（るしゃなぶつ）とともに永世保存されるというのが創建当時の願いであった。しかし、一般公開されることこそなかったが、その実用や鑑賞愛玩を目的として宝物の多くが、頻繁に活用されていた事実はあまり知られていない。

時代とともに

正倉院が創建された当時は、天然痘をはじめとする疫病や天災が続き、社会不安が高まっていた。そうしたなか、光明皇后ゆかりの施薬院（せやくいん）や内裏（天皇の御所）などで病に苦しむ人びとのために活用されたのが正倉院の薬物であった。これは、もともと光明皇后が病人のための活用を願って献納したものである。また、花氈（かせん）という絨毯（じゅうたん）のような敷物が聖武天皇の法要のために大量に貸し出されることもあった。七六四年の恵美押勝（えみのおしかつ）（藤原仲麻呂）の乱では武器武具のほとんどが出蔵され、乱が治まった後も戻らなかった。平安時代初期（八二〇年代）までは、楽器や屏風（びょうぶ）などもしばしば内裏に運ばれ利用された。

しかしそれ以降、ときの権力者による訪問や香木の切り取り、江戸時代の一〇〇年以上にわたる屏風出蔵などの例はみられるが時代の嗜好（しこう）や人びとの関心が宝物から離れ、活用事例は減少する。

正倉院には盧舎那仏の開眼会に関連する品が多数収められた

宝物と資料

一般公開は一八四七年の東大寺大勧進所による開帳が最初である。文書や屏風などが二月堂で公開された。明治に入ると、奈良博覧会が東大寺を会場として開催され、宝物も大仏殿に展示された。このことが奈良博物館設置の機運を高めることにもなった。

宝物活用の歴史は現在の管理体制からはかけ離れたものも多く、これを現在の博物館資料の活用と同列で語ることはできない。しかし、その活用は意外にも頻繁におこなわれており、正倉院には保存機能だけではないさまざまな側面があったことがわかるのである。

奈良博覧会で正倉院宝物が展示された東大寺大仏殿

みんぱく 私の逸品

ギター

押尾（おしお）コータロー

標本番号　H0098460
地域　スペイン（推定）
収集年　1982年

僕は大阪の出身です。みんぱくはこのあたりの遠足の定番コースで、僕も小学生のころに遊びに来ました。当時は、暗くて、おどろおどろしいお面などがたくさんあって、気持ち悪いな、怖いなという印象がありました。そして、当時の記憶を抱いたまま大人になって専門家やマニアックな人しか立ち寄れない場所というイメージを漠然ともっていました。

ところが今回、久しぶりにみんぱくを訪れ、新しい音楽展示をみて、随分イメージが変わりました。いい意味で敷居が低いというか、雰囲気も明るくなっている。特別な知識をもたない人でも楽しめる、興味をもつことができる。そして何かを見つけることができる。そんな印象をもちました。

たとえば映像による展示。とくに楽器の場合、モノだけを見ていてもわかりづらいことがたくさんあるのではないでしょうか。それが豊富な音や映像を通じて、演奏方法や奏でられる時、場所、そしてかかわる人びとの様子を知ることができる。モノを展示する博物館で「音を感じる」ことができるんです。

もちろん、楽器そのものから想像するという楽しみもあります。僕がとくに興味をもったのは「ギター」のコーナーです。サウンドホールのサイズや弦の数、素材、大きさ、それに収集された地域などから、音やその楽器を奏でる人びとの暮らし、楽器の構造から見える地域的な特色やその伝播などにも思いをめぐらすことができます。

それ以外にも、ギター前史ともいえる各地域の伝統的な弦楽器とともに、僕たちにもなじみのある現代のギターが並べられていて、楽器の変遷を追いつつ、短時間でまとめて見ることができたことも面白かった。スペインのフラメンコギターや南米のチャランゴ、それらと一緒に自分が中学生のころに使っていたヤマハのギター、マーチンやギブソンといった当時あこがれだった海外のギターを目にすることができます。

展示場に並ぶギターのなかで、とくに惹かれたのは、全体に螺鈿の装飾がほどこされているギターです。この楽器を作った人の職人魂を感じました。比較的小さなボディからは優しい音が聞こえてくるような気がする。そして、これだけの美しい装飾をほどこしたギターは、どんな人の手にわたったのだろうか、などと想像もふくらみました。

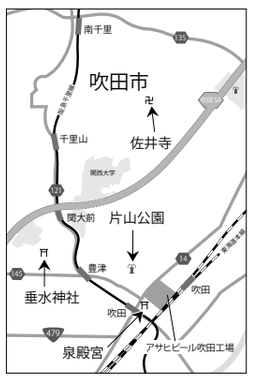
プロフィール
2002年7月アコースティック・ギタリストとしてメジャーデビューし、同年10月に全米メジャーデビュー。オープンチューニングを駆使した迫力あるギターアレンジや、あたたかく繊細なギタープレイは世代を超えて多くの人びとに支持を受けている。
http://www.kotaro-oshio.com/

散策と思索の径

吹田の三名水を訪ねる

久保正敏
民博 文化資源研究センター

六月まで開催の民博の企画展「水の器――手のひらから地球まで」に関連して、吹田市との連携講演会向けに吹田市の水を集める必要が生じたので、晴れた土曜の午後、吹田の名水を訪ねてみた。



民博周辺の名水

日本各地に名水とよばれる湧水がある。一九八五年に環境庁（当時）が発表した「名水百選」が有名だ。河川も含め、保全状況が良く地域住民等による保全活動があることを条件に、全国に公募したなかから選定されたものだが、大阪府で当選しているのは水無瀬の離宮の水、一カ所のみである。ほかにも自薦他薦の名水は各地にあり、個人探訪記サイトや書籍も多い。そこで、民博の地元吹田市ではどうか調べると「吹田三名水」の存在を知った。「垂水の神泉」「佐井の清水」「泉殿宮の霊泉」である。

鎮守の森を目指す

まず、式内大社である垂水神社を訪ねよう。幹線道路からはずれた住宅街の奥、こんもりした森の麓にある閑静な神社である。縁起によれば、神域の丘の上からかつては大坂城天守閣が見えたらしい。天守閣の位置は大化の改新直後の難波長柄豊碕宮に重なり、その真北に垂水神社が設けられたのも、古来、水に恵まれた当地に、雨をもたらす神がまつられたのが起源という。

門を入った左手に立つ、志貴皇子作「いははしる垂水の上のさわらびのもえいずる春になりにけるかも」の万葉歌碑は、この地で詠まれたとして建てられたもの。ただし神戸市垂水区も、この歌を引き合いに出しているが、垂水とは字のごとく滝を指すので、あちこちに候補地があるのも不思議ではない。石碑の奥に行場があり、背後の鎮守の森から湧き出した水が、龍の形をした「吐水龍」から滝となって落ちている。蛇口の形を龍にするのは、水のシンボルと見なす東洋に多いが、古代エジプトでは獅子の形にしたという。よく似たことばに「龍吐水」があるが、これは我が国最初の消防ポンプのことで、民博の標本資料にもある。おっと、閑話休題。鎮守の森が禁足地として保護されてきたために、今でも豊かな水が湧き出すのだろう。滝水に礼拝する付近の住民の姿も見かけた。

垂水神社

垂水の神泉

佐井の清水の水源地

片山公園「壁泉」

住宅街の坂道を行く

次に「佐井の清水」に向かう。住宅に囲まれた丘の上にある佐井寺の境内、「佐井の清水」の石碑の脇の吐水龍から、ポタリポタリとごくわずかに水が滴る。住職に伺うと、三〇〇メートルほど離れた水源地からパイプで引いているとのこと。住宅街の坂道を登って行くと、コンクリートで固められた水源があり、鉄柵の結界の奥に「佐井の清水」の石碑が立つ。行基が祈祷して湧き出した水と伝えられるが、その上方にも住宅が建ち並ぶなかで、いつまで清水が湧き出るだろうか。

アサヒビール発祥の地

最後に向かった「泉殿宮」は、アサヒビール吹田工場の隣、府道一四号線に面している。清和天皇貞観のころ、播磨から京都祇園八坂神社に向かう「建速須佐之男大神」の御神輿が立ち寄った際に、おりからの干魃の解消を祈ったところ、忽然と水が湧き出たという。一八八九年にはこの霊泉をビール処ミュンヘンに送り、ビール醸造に適した水とのお墨付きをえたので、同水系の湧水を原料として大阪麦酒会社吹田村醸造所が建設されたのだ。今でも水商売も含む水関係者に信仰されてはいるが、経済成長期以降、水量は減り続け、一〇年ほど前には涸れてしまって、今は「遺跡 泉殿霊泉」の石碑と乾いた水場が残るのみ。アサヒビール工場でも一一カ所あった井戸を一九六九年に廃止したという。

水質分析によれば

地質図を見ると、三名水はいずれも、淀川・神崎川水系の作る沖積低地と千里丘陵との境界線上にあり、丘陵で涵養された地下水が低地に顔を出す地点であることに納得した。涸れてしまった泉殿霊泉に代わる水はないかと、北隣の片山公園を訪ね、「壁泉」という施設を見つけた。吹田市緑化公園室によれば、一九九〇年の公園再整備の際に、地下二五〇メートルから地下水を汲み上げ、消毒や鉄分除去などの処理をして公園内のせせらぎや池の水として利用しているものだ。

さて、代用も含め三名水を手にしたので、本誌六月号に寄稿いただいた総合地球環境学研究所の中野孝教先生に、水質分析をお願いした。イオン成分や酸素水素安定同位体比を分析した結果、垂水の神泉と佐井の清水は千里丘陵の降水を起源とするようだが、後者はイオン成分が多く窒素濃度が高い点から人間活動の影響が示されていること、壁泉の水は深い地下水の特徴を示し、遠く能勢地方山間部の降水を起源とするらしいことがわかった。また、垂水の神泉が「薩摩のかくれ水」や「霧島の天然水」に似ているなど、イオン成分から見れば、いずれの水にも、日本各地で販売されている名水のなかに似たものがあるという。

かくて、三名水を訪ね千里丘陵周辺を巡ってはみたものの、千里ニュータウン開発や大阪万博を契機に大きく変わった自然と湧水、地域での信仰や位置づけの変化を、あらためて考える機会となった。

わずかに滴る佐井の清水

多文化をささえる人びと

難民支援から日本社会の成熟をめざして

認定NPO法人 難民支援協会

日本が第3国定住による難民の受け入れを決めた。パイロットケースとして、今年から3年間毎年30人の計90人を受け入れる方針だという。外国人として日本に暮らす筆者にとって、これはグローバル化や日本社会が目指す多文化共生への努力のあらわれであり、同時に難民の受け入れに消極的姿勢をとっていた日本社会が国際社会への連帯感を示そうとする意志として歓迎すべき話題であった。しかし、このニュースは日本社会にはどれくらい理解され、また関心をもって受けとめられたのであろうか。そもそも、「難民」という概念や知識はどの程度日本に認知されているのだろうか。

金 美善（キム ミソン） 民博 外来研究員

日本の難民

難民とは、「難民の地位に関する条約」では、「人種、宗教、国籍、もしくは特定の社会的集団の構成員であることまたは政治的意見を理由に、自国にいると迫害を受ける恐れがあるという十分に理由のある恐怖を有するために国籍国の外にいる者」と定義されている。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の調べによると、世界には約一一〇〇万人の国外難民が存在し、国内避難民を入れると二六〇〇万人に達する。

日本は一九八一年に難民条約に加盟したが、現在まで約五〇〇人あまりが難民認定（申請者は約七三〇〇人）をえて日本に生活している。他にもインドシナ難民受入制度で受け入れられた約一一〇〇人のインドシナ難民がいる。難民を積極的に受け入れている欧米に比べると日本の難民の数や認定率ははるかに低いが数年前から申請者数も認定者数も増加している。しかし、他の在日外国人に比べ、日本の難民たちはどのような背景をもち、どのようにして生活をしているのか、ほとんど知られていない。

難民支援協会

筆者が難民支援協会と出会ったのは、二〇〇九年、協会主催の「難民アシスタント養成講座」に受講者として参加したときである。東京に活動拠点を置く協会が他の地方にも難民への理解を広めるため開いたもので、難民支援の第一線で活躍する講師陣の講義に難民問題に関心をもつたくさんの参加者が熱心に聞き入っていた。難民の存在感が薄い日本で協会の支援を受けている当事者である難民から、日本での生活実態を聞く機会が設けられたのも印象に残る。

NPO法人難民支援協会は一九九九年に創立され今年一一年目を迎えた。難民が日本で自立した生活を安心して送られるように、UNHCRと連携しながら、法的支援、コミュニティ支援、生活支援などの活動をおこなっている。また、セミナーやシンポジウムなどホスト社会に難民の存在を知ってもらうための活動や他の国の諸団体との連携や情報交換、さらに日本の難民保護制度の改善のための政策提言なども重視している。

去年一年間に四〇カ国から四〇〇人に上る難民支援の相談があり、約一万件の支援活動をおこなった。難民の多くは文化や生活習慣のなれない日本での生活で精神的なストレスを抱え、難民申請から結果が出るまでの二年から一〇年のあいだ、公的支援もほぼない状態で不安な暮らしを余儀なくされる。さらに申請中は法的地位が安定せず、特に、認定がえられず、退去強制令書発布後、国外退去が可能なときまでの収容は期限がない。そのため希望が見えないまま、とぼしい公的生活支援で苦しい生活を送る人も少なくないとされる。

協会ではパートタイムをふくめ一八人のスタッフが支援活動に取りくんでいるが、それを約一〇〇人のインターン・ボランティアが支える。活動はおもに寄付金や助成金でおこなわれるが、協会の活動を資金的に支援する難民スペシャルサポーター、寄付者が約一二〇〇人いる。事実上、民間最大の難民支援組織といって過言ではない。

難民とともに歩む日本の近未来

インタビューに応じてくれた広報担当の鹿島さんに、難民支援の意義や今後の目標についてたずねた。彼女は言う。

「これからは日本社会と難民、外国人との接点がふえ、子どもの学校や職場など生活のレベルで難民の存在が日常化していくでしょう。したがって地域やコミュニティレベルで難民を支えていく姿勢がますます大切となります。」

今まで難民に対していだいていた排他的な偏見はすて、彼らが日本社会の構成員として自立していくため支援していく必要がある。単なる同情の対象や重荷と見るのではなく、長い目で見れば難民が日本社会の資源、人材として活躍できるのが、難民支援の理想であると強調する。そして究極的には国に難民をとりまく制度を改善してもらい官民一体となった難民支援体制の実現が目標である。熱心に活動をかたってくれた彼女自身、難民支援を通じて世界観が広がり、満足と充実した時間を送っているという。

わたしたちの多くは国籍をもつ国民として暮らしている。グローバル時代にあって国境を越える機会は多いが、いざとなれば帰る国が確保され、迎えてくれる国がある。当たり前のようなことだが、世の中にはこのような当然のことが享受できず、剥奪（はくだつ）された人びとがいる。日本はコスモポリタニズムをライフスタイルの理想とし自らの海外への越境は追い求めながら、その反面、外からの越境者を排除し拒み、内なる国際化には消極的であった経緯がある。

その意味で、難民支援協会の活動は、単に難民の支援のみならず、日本社会の意識の底力を引き上げ、成熟した市民社会を養成する場でもあるように思えた。難民はその社会の鏡であるという協会の鹿島さんの話は、大いに共感できるものであった。

大阪でおこなわれた難民アシスタント養成講座（提供・難民支援協会）

日本で生まれたあらたな家族（ミャンマー人の方）（提供・難民支援協会）

住まいを失った難民のために住まいを手配、同行する（提供・難民支援協会）

オフィスにはスタッフが常時対応している

認定ＮＰＯ法人 難民支援協会　〒160-0004　東京都新宿区四谷1-7-10 第三鹿倉ビル6Ｆ　http://www.refugee.or.jp/

CALENDAR 八月 第29回

歳時世相篇

焼肉の日（日本）
語呂合わせの記念日

朝倉（あさくら） 敏夫（としお）
民博 文化資源研究センター

いい夫婦の日に虫歯の日、
日本には語呂合わせによる記念日が多くある。
夏休みも残りわずかとなり、
子どもは宿題、大人は夏バテが
気になりはじめる八月二九日、
この日が意味するものは……

折り込みチラシが教えてくれる

インターネットが氾濫（はんらん）する時代、新聞の折り込みチラシを見る人は少なくなっているようだ。しかし、スーパーマーケットの折り込みチラシで、今晩のおかずを決めている家庭の主婦はまだ少なくないだろう。かくいうわたしは、スーパーのチラシに年中行事の食文化を見る。正月のおせち料理に始まり、七日の七草がゆ、二月は節分のイワシや寿司の丸かじり、三月はひな祭りのあられや春分のぼた餅。スーパーのチラシは、わたしたちに歳時食を教えてくれる暦でもある。

では今月、八月は何があるだろう。二九日の「焼肉の日」がある。この日を設定したのは、平成四年に結成された「J・Y」、正式には「全国焼肉店経営者協会」である。その会誌『ヤキニク・パラダイス』の創刊号に、焼肉の日を設定した動機が書かれている。「まず、第一は業界の公益性を図る団体があることを多くの人に認知してもらうこと、第二に家庭料理としての焼肉は認知されていますが、外食としての焼肉料理普及、次いで協会が発足してから日が浅いため、未入会の方に協会員のメリットを知ってもらうことなどです。八月二九日にしたのはゴロ合わせ。焼肉はスタミナ料理のイメージがあり、ちょうど夏休みの終わりで夏バテが始まる時期ということもあって、タイムリーな設定になっています」とJ・Yの会長がインタビューに答えている。

あわせて、J・Yでは、夏こそ焼肉がぴったり合う季節と、八月一日から二九日まで全国キャンペーン「J・Yヤキニクまつり」を開催するとある。

語呂合わせ日本

夏休みの終わりに合わせて家族で焼肉パーティーというのも納得だが、八月二九日で「ヤ（八）キニク（二九）」という語呂（ごろ）合わせがにくい。日本には語呂合わせによって設定された「何々の日」がたくさんある。焼肉店の電話番号に八九二九（ヤクニク）、四九八九（ヨクヤク）が多いのもそうだが、語呂合わせは日本文化といえそうだ。ちなみに焼肉と並ぶ韓国料理の代表キムチは、その辛さのもとの「トウ（一〇）ガラシ（四）」からとって一〇月四日を「キムチの日」にしようともくろんだが、あまり知られていない。

焼肉からYAKINIKUへ

焼肉を韓国料理の代表といってしまったが、焼肉という料理名は韓国にはない。韓国では、カルビクイ（カルビ焼き）、ロースクイ（ロース焼き）、コプチャンクイ（ホルモン焼き）、ソグムクイ（塩焼き）など、肉の部位や焼き方別の料理名になっている。しいて焼肉に相当することばをさがせばプルコギ。直訳するとプルは火、コギが肉だから「火肉」となる。ただし、料理としてはまったくの別物。ジンギスカン鍋のような鉄板に、タレに漬けられた薄切りの肉をのせて焼き、牛の骨などからとったスープがそそがれる。韓国風すき焼きといったものである。

日本の焼肉は、在日韓国朝鮮人がそれまで日本人があまり食することのなかった内臓を焼いて食べるホルモン焼きを戦後の闇市（やみいち）で売り出したことに始まるといわれる。その後、煙モクモク、油ギトギトといった焼肉店が、「無煙ロースター」の発明により、女性や子どもも気軽に入れる店に変身してきた。焼肉店は、さまざまな肉の部位をとりそろえ、サイドメニューを充実し、店のヒストリーを打ち出し、日本人の嗜好（しこう）に合う店を作りあげてきた。『焼肉店繁盛の一〇のノウハウ』と題したマニュアルには、「焼肉のルーツは韓国であるが、味の原点は和食である。この観点から、器、盛りつけにも気を配ることが必要である」とある。また、「焼肉のタレ」の開発によって、本場の味だけでなく、日本人の口に合う和風の焼肉が家庭に普及してきた。焼肉のタレは、食品産業のひとつのジャンルを形成するまで成長している。

今や焼肉は日本の食を代表するものになっている。外食としての焼肉は、高級な専門店からファミリーレストランや定食屋でも食べられる。家庭での焼肉は、大人も子どもも大好きなおかずになっている。しかも、フライパンひとつで手軽に作れる。日本での焼肉は「外食ではごちそう、家庭では手抜き料理」といわれる由縁だ。

それにしても焼肉というのは、すばらしいネーミングだった。焼いた肉という単純明快な名前は、肉の種類、焼き方、味つけ、どれを変えてもかまわない。だからこそ、さまざまな焼肉が開発され、進化してきた。そして、YAKINIKUはSUKIYAKI、SUSHIに続いて世界に打って出ている。

もうひとつの八月二九日

日本の焼肉は、朝鮮半島をルーツとし、在日韓国朝鮮人によって生み出され、日本社会が育てた料理。民博の機関研究の用語を借りれば、朝鮮半島からもたらされ、日本社会が包摂し、自律した食となろう。「焼肉の日」の設定は、焼肉が日本化に成功した記念日ともいえる。

この焼肉の日、八月二九日は、奇（く）しくも韓国併合ニ関スル条約が発効された日でもある。朝鮮半島が名実ともに日本に植民地化されたのが、一九一〇年のこの日であった。語呂合わせで覚えると「人（一）悔い（九一）を（〇）残す韓国併合」である。今年はその一〇〇周年にあたる。

焼肉の焼き手はお母さん。川西市にて（撮影・久保正敏）

フィールドで考える

門の向こうに広がる世界

今中 崇文（いまなか たかふみ）
総合研究大学院大学 博士課程

急速に姿を消す路地

中国の首都である北京の旧市街地に残る、「胡同（フートン）」とよばれる細長い路地や横丁の存在はご存じの方も多いであろう。北京の下町に暮らす人びとの日常を描いた数々の映画、『胡同のひまわり（原題：向日葵）』や『胡同愛歌（原題：看車人的七月）』、『胡同の理髪師（原題：剃頭匠）』などの邦題には、原題にはまったく含まれないにもかかわらず、いずれも「胡同」が含まれている。このことからも、その人気の程がうかがわれる。

わたしの調査している西北部の古都、西安にも同じような細長い路地があり、おもに「巷子（シァンズ）」とよばれている。明代に築かれた城壁に囲まれた旧市街地には、かつては数多くの路地があったというが、近年の都市再開発のなかで取り壊され、急速にその姿を消しつつある。

現在、西安市内でむかしながらの路地が残っているのは、わずかに旧市街地西北部の一画だけとなっている。そこは、およそ一・五キロメートル四方の限られた地域ではあるが、三万人ともいわれる回族が集住する地域としても知られている。回族とは、イスラームの信仰に基づく独自の習俗を保持している少数民族であり、それぞれの所属する清真寺（イスラーム寺院）を取り囲むように地縁的なコミュニティを形成している。この地域には一二の清真寺が並び立ち、それぞれに独立した、大小さまざまなコミュニティが存在している。

地域内の街並み

わたしは、この地域の回族コミュニティを調査するため、そのなかでももっとも規模の大きな清真寺に一年近く通い続けていた。

門の向こうに見える世界

調査をはじめた当初、この地域に知り合いもいなかったことから、網の目のように広がる路地に足を踏み入れることはなかなかできなかった。多くの路地の入口には門が設けられており、それを開けてなかに入って行くのははばかられたのである。たまたま門が開いているときになかの様子をうかがうと、路地に椅子をもち出して談笑している女性たちや、走り回る子どもたちの姿を見ることができた。その後、清真寺に足しげく通い、そこで知り合った方々の自宅に招待されるようになってはじめて、ようやくこれらの路地に足を踏み入れることができるようになった。

清真寺での礼拝の様子

通りに面した門をくぐると、路地の両側にはコンクリート、もしくはレンガを積んで作った壁が続いている。ところどころに各家の門が設けてあり、ほとんどが鍵もかけずに開け放たれている。その長さには違いはあるが、わたしが足を踏み入れたことのある路地は、おおむねこのような風景になっていた。

路地で営まれる宗教行事

ある日、いつもお世話になっている方々が清真寺の宗教職能者（「アホン」という）の自宅でおこなわれる行事に招待され、わたしも同行することが許された。このときおこなわれたのは「乞貼（ニィエティエ）」とよばれ、結婚や葬式はもちろんのこと、新築、転居、さらには子弟の大学合格など、さまざまな場合に営まれるものであった。

一行の後について路地の門をくぐり、奥に向かっていくと、多くの人が路地にもち出した椅子に座っていた。路地に面した家々では、主催するアホンの家でないにもかかわらず、可能な限りの机を並べて続々と集まって来る人びとを迎え入れている。われわれもまた、そのなかのひとつである知人の家に入り、用意されていたお茶やお菓子などをいただいて談笑する。しばらくすると、窓の外からコーラン（聖典）を朗誦（ろうしょう）するアホンの声が聞こえてきた。コーランの朗誦は行事に参加した複数のアホンによって各章ごとに分担しておこなわれるため、路地のあちらこちらから朗誦の声が聞こえてくる。

コーランの朗誦が終わると、招待された人びとに食事が振る舞われる。これらの料理の調理や盛りつけもまた路地でおこなわれる。そこで使われる調理道具や器、机などは清真寺から借り出されたものであるということは後になってわかったことである。

行事開始前に談笑するアホンたち

清真寺内にある礼拝大殿での礼拝の様子

路地を同じくする人びとのつながり

このような経験を経ることにより、これまで清真寺を中心に考えてきた人びとのつながりのなかに、路地を同じくする人びとのつながりがあることが見えてきた。清真寺を同じくする人びとのあいだでも、場合によってはいくつかのまとまりにわかれることがあるが、その場合には往々にして路地ごとにわかれる傾向があるといえる。

最初は足を踏み入れることもはばかられていた門をくぐり、路地で営まれる行事に参加できたことで、わたしの世界は確実に広くなった。次はどのような門が待っているのか、期待に胸がふくらむばかりである。

知人宅でムハンマドを讃える預言者賛歌を朗誦する参加者たち

8月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間　14 時 30 分から 15 時 30 分（8 月 1 日を除く）
■本館展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

1日（日曜日）
時間：15 時から 16 時
話者：朝倉敏夫（文化資源研究センター教授）
話題：朝鮮半島のトラ
場所：朝鮮半島の文化展示

8日（日曜日）
話者：笹原亮二（民族文化研究部准教授）
話題：ギターと世界　－歴史の中の音楽と楽器－
場所：本館展示場内ナビひろば

15日（日曜日）
話者：日髙真吾（文化資源研究センター准教授）
話題：被災文化財を救う
【企画展「歴史と文化を救う――阪神淡路大震災からはじまった被災文化財の支援」関連】
場所：企画展示場Ａ

22日（日曜日）
話者：中牧弘允（民族文化研究部教授）
話題：万博のユニフォームはカルチャーウェアか？
場所：本館展示場内ナビひろば

29日（日曜日）
話者：山中由里子（民族文化研究部准教授）
話題：アレクサンドロスは「大王」なのか？
場所：本館展示場内ナビひろば

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06－6877－8893／平日9：00～17：00）

編集後記

入道雲の8月は、青春の冒険、ほろ苦い恋、夏祭り、花火など、齢を重ねたわたしには記憶のページが切なく蘇る季節だ。これら記憶イメージは、雷鳴、風鈴、蝉時雨、さまざまな音に彩られている。記憶は音と強く結びついている。

たしかに、音の振動は身体を震わせ、さまざまな情動を引き起こし、想像力をかきたてる。だからこそ身体に深く刻まれるのだろう。また、視覚と違って聴覚は指向性が少ないだけに、音は、まわりの人びとを巻き込む力がある。音のもつこうした身体性・共同性に着目して音声言語社会を論じたのは、マクルーハンだった。

今号の特集では、3月末にリニューアルオープンした音楽展示を、音のもつ力という観点から紹介いただいた。身体性・共同性を伴う音の力に着目することは、人の営みの共同性をあらためて考えるきっかけになるだろう。

民博創設者でもある梅棹忠夫先生の訃報に接し、学恩を受けた一人として衷心から哀悼の意を表したい。本誌でも先生を偲ぶ特集を企画中である。（久保正敏）

●表紙：牛とともに門づけをおこなうチャルメラ（ナーガスワラム）奏者（インド）

次号の予告

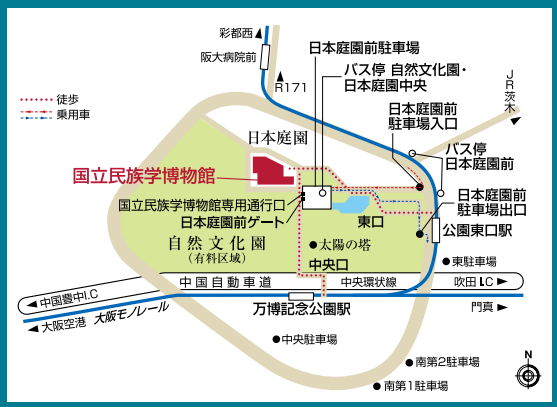
特集
彫刻家エル・アナツイのアフリカ

月刊みんぱく　2010 年 8 月号
第 34 巻第 8 号通巻第 395 号　2010 年 8 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　西尾哲夫
編集委員　久保正敏（編集長）　朝倉敏夫　樫永真佐夫　庄司博史　中牧弘允　山中由里子
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/